

どのような作用を放射収支に及ぼすかという問題も重要である。このような場合も含めて、放射の研究には長波および短波の放射について、それぞれ上向きおよび下向きの四つの flux が、それぞれ別々に測定されることが望ましい。正味放射の量が同一の場合でも、四つの flux は同一とは限らないからであり、他地域との比較のためには四つの flux を知る必要が生じる。

Interface と大気との組合せで生じる熱収支現象の具体例の一つとしては、シェラネバダ山中の開けた雪上と森林中での熱収支の比較観測結果を挙げることができよう。観測の結果、正午頃には森林中の樹冠でとらえられた熱のうち 80ly/hour が雪面上の空気へ顕熱の移流として運ばれることがわかった。そのため森林周辺の気温は、雪面上にあるにもかかわらず、interstorm period には日中 15°C にも達するのである。いわゆるオアシス効果も移流によって生じる現象であり、一つの景観要素 (landscape elements) から他の景観要素へと空気の流れがあるばあいには、どこでも移流効果が現われる。より大きなスケールの現象としては海風の侵入を、またさらに大きなシノプティック・スケールの現象としては気団の変質を挙げることができる。日本の北陸地方や五大湖の南側における豪雪などとの関連で、これらの研究は実用上もきわめて重要である。

Interface はまた substrate との組合せにおいて地域

的差異を生じる。地表が土壌であるか湖沼であるか沼地であるかによって、substrate 中の熱貯留は当然ちがってくる。

地理学者として考えると、以上のような interface の諸性質を図化できないだろうかという疑問が生じてくる。それはきわめて大切なことであるが、しかし interface がどのようなものであり、また interface がどのような働きをしているかを決定し、そしてそれを図化するためには、その前に為されなければならない多くの仕事が残されている。各国のいろいろな学問分野で得られた情報を交換することもそのための前提の一つといえよう。

\* \* \*

以上が講演のあらましであるが、講演のあと Miller 教授は多くのスライドを使って、地球上の各地の熱収支に関する図や表、あるいは観測方法などについて、具体的な説明をつけ加えられた。それらの図や表をここに列挙することはできないが、それらの多くは下記の論文に引用されているので一読されることをおすすめする。(文責 東京教育大学 榎根 勇)

Miller, D.H.: The heat and water budget of the earth's surface, *Advances in Geophysics* vol. 11, 175-302.

## 地物研連気象分科会報告

### (1) IUGG 総会について

IAMAP (ICSU の気象分科会で正式名は International Association of Meteorology and Physics) と ICDM (IAMAP の力学分科会で正式名は International Commission for Dynamic Meteorology) と共催の形で次のようなシンポジウムおよび委員会が開かれる予定。

- (イ) 1967年9月29日および30日: メソスケールと大規模スケール現象の相互作用のシンポジウム
- (ロ) 10月3日および4日: 大気科学委員会との協力について。

上記二つのシンポジウムで討論される話題は

- (a) ハリケーンの発生について  
(話題提供者 浅井を予定)
- (b) 大規模スケール現象の統計的取扱いについて  
(話題提供者 Monin (ソ) を予定)
- (c) 大規模スケール運動中における内部重力波の取扱いについて

(話題提供者 Bretherton (英) を予定)

- (d) 南半球で実験した Ghost バルーンについて

(話題提供者 Lally (米) を予定)

- (e) 力学モデルに対する放射の取扱いについて

(話題提供者 Lindzen を予定)

以上の各題目について、招待論文は三つを予定。

- (ハ) 9月25日および10月2日: IAMAP 委員会

- (ニ) 9月28日: ICDM 委員会

### (2) 事務報告

1月7日の気象分科会でのとりきめの主なものは次の通り。

- (イ) 本年度の国際会議への出席希望者(7名)のリストを作製。
- (ロ) ICSU 分担金1万円を気象学会で考慮して欲しいとの要望を気象学会に提出すること。

(幹事 岸保記)